

# 日常生活全てに困った

## 知人避け隣町に買物

### 犯罪被害という不条理

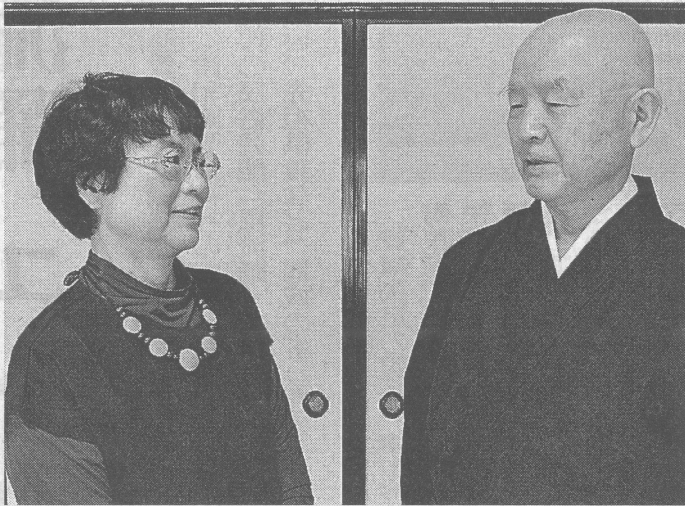
寄り添える社会へ

〈3〉

「想像していなかった日」  
「想像していなかった日」  
「想像していなかった日」  
「想像していなかった日」  
「想像していなかった日」

「想像していなかった日」  
「想像していなかった日」  
「想像していなかった日」  
「想像していなかった日」  
「想像していなかった日」

### 娘失った江角さん夫妻



事故当時について語る江角弘道さん、由利子さん夫妻。出雲市斐川町神水

たかった。当時高校生だった長男の弁当が作れずお小遣いを持たせたときも。見かねた友達が、おかずを持ってきてくれた。

周囲の目も気になった。知人に悔やみを言われるのを避けるため、買物物は最寄りではなく、隣のスーパーに行くようになった。事故の状況を聞かれ、悲しい記憶を思い出す行為は傷



事故に巻き込まれる1カ月前の江角真理子さん。京都府内

### 事件の概要

1999年12月26日未明、鳥取県智頭町市ノ瀬の国道53号智頭トンネルで、鳥取大3年の江角真理子さん（当時20）たち4人の乗った軽自動車

てならなかった」と振り返る。近隣住民を避けて2年が経過。2人は「とにかく生活の全てに困った」と口をそろえる。

例えば兵庫県明石市に目を移せば、被害者や遺族に対し、配食サービスやホームヘルパーの派遣といった日常生活支援が用意されている。被害者への理解が進む自治体があることを踏まえ、由利子さんは「こうした姿勢があるだけで救いになる。支援に選択肢が増えれば」と願う。

江角さん夫妻は現在、県内外の学校や事務所などで講演活動をしている。いつも伝えているのが「被害者やその家族は特別と見られがちだがそれは違う。昨日までは普通に生活していた」ということ。

事件から23年を迎えようとする今でも、由利子さんは警察署から電話があった午前4時に自然と目が覚めるという。「『日にち葉』はない。だからこそ、万が一に備えた支援の充実が必要で、被害者支援に地域格差があってはならない」と力を込める。